

---

# 爆発ゲーム

嶋木 スバル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

爆発ゲーム

### 【Nコード】

N1470BA

### 【作者名】

嶋木 スバル

### 【あらすじ】

主人公の早海かおるは、突然、クラスの皆と自分の命にかかわるゲームに参加させられた。

そのゲームは、自分が思っているのとは逆の事を言くと爆発してしまい、しかも・・・生き残れるのは、たった1人だけという残酷なゲーム・・・

はたして、かおる達はどうなってしまうのでしょうか???

## ゲームの幕開け

（かおるー！！早くおきなさい。）

「うーん・・・うー！！さぶ。」

（かおる起きたの??）

「起きてるよ！！」

俺は、早海かおる・・・高校2年生。母さんに無理やり起こされたわいいケド・・・

「やっぱ朝は苦手だー・・・」

（かおるー！！何寝てんの！もう遅刻よ。）

何か、母さんがどなってるような・・・気のせいかな！！

（かおるー！！いい加減にしなさいよ。）

いやいやこれは・・・まさか！！

「現実だー」

（バカ！！あんた何言ってるの。）

ポコッ

「いつてえー」

（早く学校いく用意しなさい。）

「はいはい・・・てか、今何時??」

（8時15分よ）

「えっ！！ヤバー」

何で2度寝なんてしたんだよ・・・

はぁ・・・今日はなんかついてねえな！！

（用意終わったらお母さんが送って行ってあげるは。）

「おお！！ありがとう。」

（早く車に乗って！！）

俺は、お母さんの車に乗って、学校に向かった。

今の、俺は、今日、学校であんな事がおきるなんて思いもよらなかった。

そんな事がおきるって知ったら俺は、絶対学校には行かなかったはずだ。

（かおる！着いたわよ。早く行つてらっしゃい。）

「母さんありがとう！！行つてきます。」

ガラガラー

『かおるおつせーぞ！！』

こいつは、俺の幼なじみの七瀬春人。春人とは、幼稚園以来の仲だ！！

まあ・・・当然休み時間は、春人と過ごしている。

「うるせーよ！！」

『寝坊か！？』

「そつだよ。なんか文句あるか??」

『ねえよ！！でも、かおるが寝坊つて珍しいな！！』

「そつだな。」

春人の言うとうり・・・俺は全く寝坊をしない。

「どうしたんだろう・・・俺。」

『まあ・・・たまにはいいんじゃないー笑』

「笑い事じゃねえよ・・・マジあせつたー！！」

『まだ、先生が来る前でよかったな！！』

「ああ・・・そこんこは、助かったよ！！」

ガラガラ

？はい。みんな席に着けー？

『じゃ。』

「ああ！！」

でも、ある意味今日は、ついてんのかな？？  
ようわかんねー！！

> かおる君・かおる君<

ううん、誰か俺を呼んでる・

> かおる君起きて！！<

白川香りちゃんの声がするー！！

> 3 限目始まつちゃうよー！！<

3 限目が始まる？？

「ヤバーー！！」

なぜかみんなが俺の方を見ていた。

> やつと起きたー<

「どういうこと？？」

？早海！！自分が爆睡してたのも気づかないのか！！？

「爆睡？？俺が！！」

？そつだ！！白川がずっと起こしてくれていたんだぞ？

「えっ！！白川さんごめん・」

> 良いよ！！かおる君が起きてよかった。<

うわー！！やつぱり白川さん優しいな。

「起こしてくれてありがとう。」

> うん！<

やはり、今日の俺はついていないようだ・・・

『かおる・お前大丈夫か？？』

「ああー！！」

『お前、ほんとに今日ついてねえんじゃねー！笑』

「春人・お前それでも心配してんのかよ？？」

『心配してるよー！！』

「嘘くせー！！」

『あはははは』

「お前面白がつてるだろう!？」  
『面白がつてねえよ!!』

この時、俺はなんだか嫌な予感がしていた。  
皆の死がそこまで近づいているとは知らずに……

キンーン コンーン カンーコン  
キンーン コンーン カンーコン

?あれ??おかしいな??30分も早いな?

せんせーい!!もう終わっちゃおうよ!!

?そうは、いかないだろう??

ふう・・・どうなってんだ??この学校は・・・

?じゃ・・・先生はほかのクラスに聞いてくるから静かにまって下さい。?

休み時間がいいー

そんなことを生徒達が言っている中・・・

ガチャガチャ

?あれ??おかしな・・・?

どうしたのせんせーい

?いや・・・ドアが開かないんだよ!!?

はあ・・・そんなわけないだろう!

『先生どいて』

春人は、そう言つて先生を押しつけた。

『本当だ開かない・・・』

「後ろのドアは、どうなんだよ!!」

とつさに俺は、そう叫んだ・・・

『何でだよ・・・』

「春人、どうなんだよ」

『・・・あかない。』

何なんだよ！！ ザワザワ

クラスの皆が騒ぐのは当然だ！！

なぜなら、俺たちは、この教室に・・・・・・閉じ込められたからだ！！

？皆ー落ち着いてー？

先生は一生懸命皆に叫びかけた・・・しかし。

そんなん、落ち着いていられるかー！！

とうとうその時が来てしまった。

ピンポンパンポーン

【皆さんこんにちは。お元気ですか？？】

それは、少し高めの男性の声だった。

？なんだこれは？？？

【どうも先生！！】

？誰なんだ君は？？？

【僕のことですか？？】

？当たり前だろう・・・？

【ヒミです。】

その時、俺は、自分が感じた嫌な予感、これだと気付いた！！

？他の先生に聞いてみよう！！？

先生は、ケータイをポケットの中から取り出した。

【きゃははは！！無駄ですよ先生。】

？どういうことだ！！？

【ケータイ見たらわかりますよ！！】

先生と生徒は、一斉にケータイを見た！！

どうなってるんだよ。

皆が、そういうので俺も自分のケータイを開けてみると・・・圏外だった！！

「何で、圏外なんだよ！！」

【その質問は答えられないな・・・早海君】  
「えっ！！」

何で、こいつは俺の名前を知ってたんだよ！！

【ふっ！！それはね・・・僕は、能力者からなんだ！！】

なんだよこいつ・・・なんで、俺の思っていた事がわかるんだよ！！  
【だから、言っているじゃないか！！僕は能力者だから早海君が思っていることがわかるんだよ！！】

「お前は、何が目的なんだよ！！」

【僕は、君たちとゲームがしたいんだよ！！】  
『ゲームってなんだよ？？』

春人が聞いた質問の答えは、俺達を闇の中に連れ去ろうとするものだった。

【君たち早くこの教室から出たいとおもはない？？】

何言ってるんだこいつ・・・

「出たいに決まってるだろう。」

そつだー 早くだせー！！今日、俺は用事があんだよ。

【ふう。それは嘘だよね・・・藤野宮君】

お前に、何がわかったよ！！

【何回も僕は言ってるよね・・・僕は能力者だって！！】

その時の、あいつは、様子がおかしかった！！

その時、俺はまだあいつの力を信じていなかった・・・あんな事が起きるまでは・・・

じゃ、なんか力見せてみるよ!!

正直、俺もあいつの力を見てみたかった。

【良いよ!!でも、その代り・・・藤野宮君には消えてもらおうよ!!】

俺は、この時、あいつは、何を言ってるんだと思った・・・その時・・・俺をどうやって消すのか見てみたいぜ!!

【良いよ・・・見せてあげるよ!! さようなら、藤野宮君・・・僕は、嘘をつくやつが嫌いだ!!】

あいつが、そういった瞬間、藤野宮が爆発した。

うわーなんだよ・・・藤野宮が爆発したぞ。

まあ・・・皆の反応は正しいだろう・・・

実際あまり驚かない俺でも、これは、驚いた・・・

本当にあいつは能力者だったんだと気付いた・・・

しかし、俺がそれを気付いた時には、すでに遅れだった。

【そういえば、まだ七峰君の質問の答え言ってなかったね!!】

こいつが、本当に何をたくらんでいるのかわからなくなった・・・

【爆発ゲームって知ってる??】

爆発ゲーム・・・俺はそのゲームを知っている。

「確か・・・そのゲームが行われている時は、必ず自分が思っていることを言わないといけない・・・」

【そのとおり!!もし、自分が心の中で思っているのと違う事を言ったら、僕はその人を爆発させちゃうっていうゲームだよ!!】

『そんなの、ありがよ・・・』

そうだ、春人の言うとおりそんなのは、おかしい・・・

【七峰君は正直に言ってるね。笑。だから七峰君はセーフだよ!!】

正直に言ったらいいのか！！楽勝じゃねえーか！！笑

俺は、そんなことを言った、奴がうらやましく思えた・  
人間なんてしょせん嘘の塊だ・

信実なんてたった4分の1ぐらいしかないのだ！！

だから、このゲームを楽勝つと言った奴は、相当正直者なんだろう  
な・

【ふう・・】

なんだよ

【このゲームが楽勝何て思ってるやね。 本当は・・怖くて今でも逃げ出したいと思ってるよね??】

ヤバイ・・このまま、嘘をついてるとまた爆発されてしまう・・  
止めないと・

はあ・・嘘ついてねえし。楽勝なんだっ、

「やめろー。もう嘘はつくな・」

なんだよ、早海まで、俺が楽勝って言ってるんだから嘘なわけないだろ・

「爆発したいのか!？」

うつ・・俺は爆発しないよ！！正直物だからな。笑

【ふうふう、また嘘をつきましたね・・・あなたは、もう爆発行ですね!!】

また、様子がおかしくなった!!

もう、こいつは、おしまいだ・

やっぱり、本当のことというよ・・許してくれ。

【もう、遅いです。 さようなら・・・風間君・】  
そういうと、藤野宮に続き、風間までもが、爆発した・

キヤー

やっぱりみんなは、2回目でも驚いている。

しかし、俺は、2回目ということで驚く事はなくなった・・・だが・

・  
むなしさが、倍増する。

ふと、俺は、このゲームはいつ終わるのかと疑問が浮かんだ！！

【またもや、早海君心の中でいい質問をしてくれました。】

やはり、こいつは、人の心の中お読めるんだ。

『かおる、何て質問したんだよ。』

春人はちよつとキレぎみで俺に問いかけた・・・

こんな事で嘘をつくことはないと思い俺は、本当のことを話した。

【早海君はセーフです。その答えは・・・生き残りが1人になるまで続きます。】

俺は、それを、聞いて動揺が隠せなかった・・・

「マジかよ・・・無茶だ・・・」

俺は、動揺のあまり、本音をしゃべっていた。

【ここからが、楽しみですねー！！あははー】

こいつはいったい何者なんだよ・・・

俺たちは、今までの楽しかった日々から・・・一転・・・

自分の命にかかわるゲームに参加させられた・・・

たぶん、こんなゲームをしているのは、俺達のクラスだけだろう・・・

・  
これから、俺達のどん底の日々が始まる・・・

## ゲームの幕開け（後書き）

どうでしたか？？

次回は完結編です。

どうぞお楽しみください！！

ここまで読んでいただきありがとうございました。

## 本当の真実（前書き）

この巻で爆発ゲームは終了です。

## 本当の真実

『今、何日目なんだよ……』

春人がそういうと、俺（早海かおる）は、空をみた。

爆発ゲームが始まって何日たったかわからない……  
いまだ、2人の犠牲者だけで済んでいる。

もう、これ以上犠牲者は、出さないと、心の中で誓った。

しかし……何かが変だ、あいつ（謎の男）は、2人を爆発させて楽しんでしゃいでたのに、

今は、まったく喋らない……

俺は、その時、ものすごく嫌な予感がしていた。

あんな、結末があるとは、誰も予想しなかっただろう……

ピンポンパンポーン

とうとう、その嫌なチャイムが鳴った。

【皆さーん、少しは休憩できましたか??】

?おい、早く教室から出してくれー?

先生は、必死に叫んだ……

【えー嫌ですよ……まだ楽しんでません。】

やっぱり、こいつは、人の命を持って遊んで楽しんでいるだけだった。  
?じゃ、何をしたらここから出してもらえるんだ……?

【あれ??言いませんでした?】

?いや、聞いてない……?

生き残りが1人になるまで続く。

【ピンポン 早海君正解】

またもや、こいつは、俺の心の中を読みやがった。

？早海なんて言っただんだ？？？

先生は必死な顔をしていた・・

俺は、そんな先生の顔に押されてしぶしぶ答えた。

？1人しか生き残れない・・・？

【そういう事です。せんせーい】

なんだか、あいつは徐々にテンションが高くなっている気がする・・

・

【じゃ、皆さんべらべらしゃべらないので、ここで質問タイムに入りたいと思います。】

『質問タイムってなんだよ。』

春人は、やはりキレている。

【そんなんもわからないのですか？？】

『うつせーな。』

【ごく簡単ですよ！！ただたんに僕が質問することを正直に答えればいいだけです。】

俺は、その時、この質問タイムで半分の奴が、爆発するとわかった。

どんな質問を出すんだよ。

クラスの皆は、ものすごくおびえていた。

【じゃ、まず・・・学級委員長から質問タイムに入ります。】

えっ・・・僕から。

委員長の原はものすごくおびえていた。

【なぜ、委員長になったのですか？？】

そっ・・・それは、

俺は確信した、絶対爆発3人目は、原だと。

『正直に言えよ。』

春人は原に向かってどなった。

ひい・・・えっと、僕は、ただたんに、人の役に立ちたかったから。

クラスの皆は、あいついいやつじゃんつと口々に言っていた。しかし・・・

【ふうう。それは嘘ですね。・・・】  
えっ・・・

俺は、やっぱりそう思った。

大体、委員長になるやつなんて内申点がほしい奴が多い。

たぶん、原も、内申点狙いじゃないか、と俺は、思っていた。

【本当は、内申点がほしいからじゃないんですか？？あと、・・・】  
皆がざわざわ騒ぎ出した。

待って、ください。僕は、嘘をつくきました。本当は、内申点がほしかったし、それに・・・皆の上に立ちたかったからです。  
原は、泣きながらそう答えた。

【原君・・・もう遅いですよ。さやうなら・・・原君】  
あいつがそういい終えると、原は爆発してしまった。  
38人いた生徒が残り35人になった。

【次はだれにしようかな・・・】

あいつは、また質問タイムを始めた。

【じゃ、先生にきーめた】

今度は、先生が指名された。

？えっ、僕・・・？

【はい。そうです。先生です。】

そう言われると、先生は、すごく震えていた。

【先生の質問は、自殺してほしい生徒は？？】

それを聞いた先生は、ものすごく焦って、額には大量の汗が流れている。

【あと、追加で、先生に選ばれた生徒は爆発行になります。】

皆は、先生のもとに駆け寄り自分を選ばないでくれーっと言っていた。

？自殺してほしい生徒は・・・早海です。？

「えっ。俺？？」

その時、俺は、周りにもわかるくらい動揺をしていた。

すると、幼なじみの、春人が先生のところへ駆け寄った。

『おい。何でおおるなんだよ？？』

春人は、先生の胸ぐらをつかんでそう尋ねた。

【じゃ、七瀬が早海の代わりに爆発してくれるのか？？】

『そっ・・・それは。』

やはり・・・いくら幼なじみとはいえ自分の命を捨ててまで、相手を守りたいとは思はない・・・  
春人も、自分の命とは引き換えに、俺を守りたいとは思わないだろう・・・

？早海が爆発したらいいんだよ。？  
俺はむしように腹が立った、しかし、俺は、その怒りを、自分の心の中にとどめた。

【ふうううう！先生嘘はいけないと思います。】

俺は、なぜかこの時、ほっとした気分だった。

？はあ？？嘘などついていない。？

【何言っているんです？？先生が本当に自殺してほしいのは風間君でしょう。】

？風間は、とづくに死んでるじゃないか。？

【そんな、誰も死んだ人を除く何て言ってませんよ！！笑】

先生は、またもや、額から大量の汗をかきはじめた。

？そんなの、ありかよ・・・？

先生は、地面にひざまづいた。

【残念でしたね。先生・・・さようなら。】

そういうと、先生は爆発してしまった。

それから、ドンドン謎の男は、クラスの皆に質問を出していき、次々と皆は爆発していった。

今では、38人中たった5人しかいない。

その5人とは・・・俺と七海春人と白川香りとあまり喋らない、神田結衣といつも嫌味ばかり言う吉田健吾が残った。

あと、4人が爆発する・・・いったい誰が爆発するんだ？？？

ピンポンパンポーン

【あれ？？だいぶ減りましたね〜】

「お前が減らしたんだろ。」

俺は強めの口調で言った。

【そうでしたねえ〜】

やっぱりこいつの考えていることはよくわからない。

【今からイス取りゲームを行いたいとおもいます。】

<イス取りゲーム???

とても皆が不思議そうな顔をしている。

【はい！！ゲームは簡単です。ただ単に椅子に座れなかった人を爆発させます。あと、これは、運の競技ですから押したりしたら反則で爆発させます。わかりましたか？？】

皆、しぶしぶうなずいた。

【さあー!!さっそくはじめしよう!!ミュージックstart】

謎の男の掛け声で音楽が始まった。

たーらーらーあーらーらーらーらーらーらーぷっち

いきなり音楽がやみ、俺は急いで後ろにあった椅子に座った。

そこで、俺は、あたりを見渡した。すると……立ったままの春人がいた……

俺は、目が痛くなるほど目を大きく開けていた。

「春人、どうして座らないんだよ。」

俺は、どなった。すると、春人は、『俺、もう疲れたわ・・・』と  
言って笑っていた。

そんな、笑い事じゃないだろうと俺はおもった。

【はい。失格者は、七峰春人くーん！！さようならー】

そういうと春人は爆発した。

その時、俺は、とても悲しい気持ちだった。

【はい。次まいりましょう!!】

俺は、絶対あいつを許さない。俺が必ず最後まで残って、あいつを殺してやる。

そう、俺は、心に誓った。

それから、ゲームはスタートして吉田、神田の順で失格となり爆発していった。

残ったのは俺と白川香りだけだった。

俺は、ここで負けるわけにはいかないけど、香りちゃんを爆発させるわけにもいかなかった。

【いよいよ。待ちに待ったクライマックスですね。わくわくします。】

クライマックスだからなのか、やけにテンション高いのがわかった。しかし・・俺たちは、わくわくするどころかゾクゾクしていた。

まあ・・ゾクゾクするのも、当たり前だろう。

今から、どっちかが生きてどっちかが死ぬんだから。

【では、最後のイス取りゲーム開始】

また、あいつの掛け声で音楽が始まった。

たゝららるゝららるゝららるゝたゝららるゝ  
ららるゝたゝらりららるゝららるゝプツチ

俺は、音楽が止まったと同時に後ろを見た。すると……

俺の後ろに椅子がある。しかし、俺はスト椅子に座らず、一度香りちゃんを見た。

すると、香りちゃんは俺の方を見て。

<早く座って。>

つといいそれと同時にニコっと笑った。

俺は、とても心が痛かった。

だけど、俺は、香りちゃんの言うとうり椅子に座った。

【はい！！ここで白川ちゃんは失格となります。さようなら】  
<ちよっと待ってください。最後に言わせて下さい。>

【しょうがない。なんでしょう？？】

<早海君、私は早海君の事が好きでした。>

香りちゃんは、俺の手をぎゅっとつかんだ。

正直俺も好きだった。

だけど、その時言葉にできなかった俺は、最後の思いとして、香りちゃんの手を強く握りかえた。

すると、香りちゃんはくありがとう>>と笑いながら爆発した。

俺は、とうとう一人になった。

【とうとう、ゲームが終わっちゃいましたね。今日は、楽しい1日でした。】

俺は、皆のためにあいつを殺すと心に決めたんだ。

まだ、俺にとつちや終わっていない。

「お前の名前は、なんなんだ。」

【あっ！！僕の名前？？】

「そうだ。」

【僕の、名前は、早海かおるだよ。】

「はあ・・・？？嘘つくんじゃない。本当の名前を教える。」

その時、俺は、まったく意味が分からなかった。

【嘘なんて、ついてないよ。僕は、君の心の中で作られたものなんだ。】

「俺が作り出したもの??・俺は、なんも作っちゃいねえよ」

【君ってたまに、この世は嘘だらけとか嘘つくやつは消えればいいとか思ったことない??】

俺は、その時、心あたりがあつた。

毎日のように嘘をつくやつなんて爆発したらいいと思っていた・・・もし、その思いが、今回のことをひきをこしたとしたら・・・全部俺のせいなんだ。俺が皆を殺したんだ。そう、思ったと同時に大量のが涙こぼれた。

【有るでしょう!!だから、僕が現れたんだよ。】

「俺が、あんな事思ったから皆は死んだんだ。」

俺は、全部の力が向けたように地面にとれこんだ・・・

【僕は、一生君の中で生き続けるよ。】

かすかに聞こえた声は、何て言っているのかわからず、俺は深い眠りについた。

## 本当の真実（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。

これで、爆発ゲームは終了です。ありがとうございました。

嶋木スバルの次回作もよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1470ba/>

---

爆発ゲーム

2012年1月4日13時50分発行